

◆伊藤洋二 選 ～加賀千代女の俳句より～

花に針心知りたき茨かな

茨とは棘のある木の総称。薔薇や蜜柑に代表されるように、美しい花や美味しい実がなるのが特徴で、動物の攻撃から身を守る為の植物の智慧である。筆者は定年を過ぎ、花と針、本音と建前の使い分けも不要となった自由人だが、見向きもされず、手を伸ばされもしない存在にならぬようにせねばと思う。

朝顔や宵から見ゆる花のかず

生物には「体内時計」というものがある。この時計が物理的にズレてしまうのが、「時差ぼけ」である。この対策として、米国旅行では出発前に「早寝早起」をし、欧州では「遅寝遅起」をすることである。また、現地では、正午頃に太陽光をしっかり浴びるとよいらしい。朝顔達にもこの「生物時計」があり、暗くなってから約十時間後、つまり蝶や蜂が舞う頃に朝化粧を済ませ最も美しい顔になるのである。

みみたててうさぎもなにと秋の暮

秋と言えば月、月と言えば兎。兎が聞き耳を立てているのは、♪出た出た月が まあるいまあるい まんまるい 盆のような月が♪ の童謡「月」だろうか。月の模様が兎に見え、「月には兎がいる」との伝承は、日本をはじめアジア各地に古くからあるらしい。日本では兎の横には臼があり、餅を搗いているとされ、「望月」は「餅搗」からきているという説もある。中国では不老長寿の仙薬を作るために、杵で打って粉にしている姿と見るそうである。

◆荒井良明 選

《女流ならではの諧謔》

喧嘩して月へ帰ると言つてみる 和田華凜

はつきりしない人ね茄子投げるわよ 川上弘美

両句ともなんとも可笑しい。だが、これらは男には詠めない。男が詠むにしても、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」(土佐日記・

紀貫之) という感じで、女性に仮託して、あるいは、女性の気持ちになって詠むしかないだろう。

《女たちが月の光りを浴びて月に帰っていく》

玉霰夜鷹は月に帰るめり 小林一茶

たま - あられ 【玉霰】霰の美称。季語・冬。

よ - たか 【夜鷹】①ヨタカ目ヨタカ科の鳥。(以下略) ③江戸で、夜間、路傍で客をひく下等の売春婦の称。つじぎみ。やほち。(広辞苑 第七版)

玉霰(たまあられ)のように月光が降り注いでいる。夜鷹(①の意=鳥)はひとり空をのぼって、あの美しい月に帰っていくのだろうなあ…。

この言葉の裏で一茶は、夜鷹(③の意=淪落の淵に沈んだ女)を語っている。転落した(せざるを得なかった)女の運命に満腔の同情と涙を寄せている一茶。そんな女が、月の光りを霰と浴びて、今夜は月に帰っていくのだ、と詠んだ一茶。

西洋でも娼婦を天使に見立てることがあるが、一茶も、娼婦をかぐや姫などの「天女」に近いイメージになぞらえている。おもしろい(=興味深い)。

子へ買ふ 焼栗^{マロシ} 夜寒は夜の女らも 中島斌雄

夜の女の感じる寒さにも思いをいたした中島斌雄の優しさは、一茶に通じている。

《「あるある」が人を微笑に誘う》

手袋の左 許^{ばか}りなりにける 正岡子規

うん、あるある。そして、「子規さんもそうだったのか」と、正岡子規への親近感が湧く。右利きの人が多い派だから、細かい作業をするときには右の手袋をはずすのが多数だ。そして、はずした手袋を忘れて…。

ネットで見たら、「手袋の左許りになりにける」と「に」を(勝手に)補っているのが散見された。

《子規さんの親友・漱石さんの滑稽句》

子規さんの句を引いたら、その親友・漱石さんの句も紹介しないとね。

菜の花の中に糞ひる飛脚かな 夏目漱石

これもなんとも可笑しい句である。「うんこ漢字ドリル」に大喜びする小学生ながら、漱石さんが、「菜の花の中に」で鑑賞者を惹きつけておいて、予想外の「糞ひる飛脚」と展開して、喜んでいるようにも思える。お茶目な漱石さん。漱石の時代に飛脚がいたようには思えないけれど「菜の花の中に糞ひる郵便夫」では差し障りがあるので「飛脚」とした？

《ピクトグラムを詠んだ滑稽句》

非常口に緑の男いつも逃げ 田川飛旅子

これは無季の句ですが、なんともいえぬおかしみがありませんね。非常口サインの「緑の男」は、ピクトグラムの一種。ピクトグラムとは、「絵文字、絵言葉」。「一九六〇年代以降、言語の制約を受けない『視覚言語』として世界的にその存在が注目された。日本では、六十四年の東京オリンピックを契機に導入。競技施設での誘導・案内などにその効果を発揮した。（武正秀治 多摩美術大学教授『知恵蔵』）。

（文中敬称略）